コ・ソ・アとi・ku・ceの感情的直示用法と間投詞的用法について[1]

金　　善　美

1. はじめに

指示詞[2]とは、意味的には、談話[3]が行われている現場に存在したり談話の中で登場する指示対象を指し示すために使われる言葉である。また形態的には、限られた数の語根から派生され、文の中でいくつかの品詞として使われる言葉だという特徴を持つ。

日本語と韓国語[4]の指示詞は、それぞれ３種類の指示詞が使用されており、「コ・ソ・ア」と「i, ku, ce」の３種類の語根を基に、品詞的には次の〈表１〉[5]のように分類[6]される。

〈表１〉韓日指示詞の形態的分類

	日本語（近・中・遠称）	韓国語（近・中・遠称）
名詞（もの/場所/方角）	これ・それ・あれ/ここ・そこ・あそこ/こちら・そちら・あちら	i-kes・ku- kes・ce-kes「これ・それ・あれ」2)/ yeki・keki・ceki「ここ・そこ・あそこ」/ i-ccok・ku-ccok・ce-ccok =ili・kuli・celi「こっち・そっち・あっち」
連体詞（指定/性状）	この・その・あの/こんな・そんな・あんな	i・ku・ce「この・その・あの」
副詞（様子）	こう・そう・ああ	ili・kuli・celi「このように・そのように・あのように」
形容詞	*1)	ileh-ta・kuleh-ta・celeh-ta「こうだ・そうだ・ああだ」
動詞	*	ile-ta・kule-ta・cele-ta「こうする・そうする・ああする」
形容動詞	こんなだ･そんなだ･あんなだ	*

1)*は存在しないことを示す　2)「」の中は日本語訳である

『言語文化』8-4：761－790ページ　2006.
同志社大学言語文化学会 ©金　善美

日本語の指示詞研究では、指示詞の使い分けについて、佐久間(1951)以前は話し手を中心とした近・中・遠の距離的尺度による説明（以下距離区分説と呼ぶ）が中心だったが、佐久間(1951)が話し手と聞き手を中心とする「なわばり」概念を導入してからは、指示詞は人称によって使い分けされているという説（以下人称区分説と呼ぶ）が主流になってきている。ここで人称区分と距離区分について簡単に説明すると、人称区分では話し手と聞き手は、指示対象を巡り対立する関係にある。つまり、話題になっている指示対象がどちらの勢力下にあるかといういわゆる「なわばり」問題が関わってくる時は人称によって指示詞が選ばれる。一方、距離区分は、指示対象に対する所有の権利や操作可能性など、勢力の面で話し手と聞き手の関係が同等な場合で、両者の間の対立がない場合に選ばれる指示詞の基準である。

人称区分説が主流になっている中でも高橋(1956)、服部(1961)、阪田(1971)、高橋・鈴木(1982)、小泉(1988)などの研究のように距離区分説も依然として残っている。特に、金水・田窪(1992)と小泉(1988)は、場所を指し示す「そこ」、「そのへん」や、道を教える時に使う「そこ」などは、話し手中心の従来の近・中・遠の距離区分が有効な指示用法上の基準であることを示した。

韓国語の指示詞に関する草分けの研究には崔鉉培(1955)の考察がある。崔鉉培(1955: 232)は、韓国語の指示詞「i/ku/ce(コ/ソ/ア)」に対して、それぞれ「話し手から空間的に近いか、精神的に親しいものは、話し手から近称」であり、「話し手より話し相手に近いか親しいものは、話し手から中称」になり、「話し手や話し相手に対し共に遠いものは、話し手から遠称」になると説明した。崔鉉培の説明では距離区分と人称区分が混在している。後に張奭鎭(1972: 37-38)は話の場面で話し手と聞き手の発話場所及び距離の近(proximal)、中(medial)、遠(distal)の概念で韓国語の指示詞を分類し、距離区分に近い見解を示した。　一方、張京姫(1980/1983: 288)は「i/ku/ce」はそれぞれ、「話し手の近くにあって話し手に知らされている対象、聞き手の近くにあって話し手と聞き手に共に知らされている対象、話し手と聞き手から共に遠くにあって話し手に知らされている対象」を指示していると説明し、崔と同様、人称区分と距離区分を混ぜた基準を示した。これに対し、代表的な人称区分の研究に任洪彬(1987)がある。任洪彬の研究については後ほど詳し

く紹介する。

筆者は基本的に指示詞の用法を決定する選択原理として人称区分と距離区分は両立できるという立場の下、研究を進めてきた。今回はそれら二つの基準の中でも、先行研究において韓国語と日本語の指示詞の用法を説明する基準として大きなウェートを占めている人称区分について詳しく述べてみたい。

人称区分的原理がもっとも顕著に現れているのが、指示詞から派生したと考えられる一群の間投詞である。これらの間投詞と指示詞の相関関係を指摘したのは森田(1973), 定延・田窪(1995), 森山(1996)で簡単な記述が見られるが、韓国語と日本語の両言語において、コ・ソ・アとi・ku・ceの全てについて間投詞的用法と指示詞との関連を指摘した研究としては金善美(2004b)が初めてである。指示詞は韓国語ではi・ku・ceが、日本語ではコ・ソ・アがそれぞれ一つの体系をなすものであり、それぞれの言語においてこの三者の対立を記述することが重要である。指示詞由来の間投詞においてもこの三者の対立が生かされていること、また二つの言語の間に違いも表わされていることを指摘した点に金善美(2004b)の研究の意義がある。

本稿では金善美(2004b)に基づき、このような指示詞由来の一群の間投詞の用法について、主に現場指示が使われた場面を中心に観察し、間投詞の用法の選択原理とそれに関与する指示詞の人称区分原理との関連性について考察する。

2.　現場指示

本稿においての現場指示とは、指示対象が現場に存在しているか、存在していると看なすことのできる空間的範囲内に存在する場合に、その指示対象を指示する用法のことである。ここで存在していると見なすことのできる空間的範囲とは、指示対象の人物が談話の現場から退場した直後などの場合等で現に視覚的に確認できるわけではないが、現場の延長線上の空間に指示対象が存在すると考え、それを現場指示用法で指示しても指示対象の同定に問題が生じない空間のことである。この問題に関しては、金水(2000:161)も「現場指示を用いるための条件としては、「見えること」よりも「存在してい

ること」を要件とした方が現象をうまく説明できる」と指摘した上で、「指示対象が存在する場所を仮に「直示空間」と呼んでおこう」としている。本稿における空間的範囲とはこの「直示空間」に通じる。

3. 人称区分指示

韓国語と日本語の次のような例について考えてみよう。

(1)　A: (Bが手にとっている本を指しながら)

ku　chayk　eti-se　sassni?

その　本　どこ-で　買ったの

「その本、どこで買ったの。」

B: ike?　ike　hakkyo　aph　secem-eyse　sassta.

これ　これ　学校　前　本屋-で　買った

「これ？これ、学校の前にある本屋で買ったの。」

(2)　廊下へ出ると、受付の女子社員がやって来た。

「あ、社長、ここだったんですか。お電話が……。あら、その埃、どうしたんです？」

「いえ、何でもないの」

と伸子は埃を払って言った。(『女社長に乾杯！』赤川次郎 1984)

例(1)と(2)のように、一人称と二人称という人称による指示詞の使い分けは、正保(1981:68)を始めとする従来の研究では「対立型」と呼ばれてきた。この対立型とは「コ」と「ソ」、「i(コ)」と「ku(ソ)」が二項対立する体系である。人称区分指示はこの対立型に基づいていて、人称区分指示においてはある指示対象に対し話し手と聞き手のどちらの所有物であるか、もしくはどちらに操作可能性が与えられているかなどの所有関係や操作可能性（勢力関係）が指示詞の選択において考慮される。

人称区分指示による韓国語と日本語の指示詞の使い分けは以下のように行なわれる。なお以下の使い分けで「勢力圏」とは神尾(1990)では「指示のなわ張り」とされているものである。

＜人称区分指示による韓国語と日本語の指示詞の使い分け＞

・i系とコ系：話し手に近くてその勢力圏内に存在すると認められる対象を指す
・ku系とソ系：聞き手に近くてその勢力圏内にあると認められる対象を指す
・ce系とア系：話し手、聞き手から遠くてその勢力圏外にあると認められる対象を指す

ここでの近・中・遠は神尾(1990:145)と同様、話し手と聞き手から事物の存在する領域までの心理的距離を表しており、人称区分での遠とは物理的距離ではなく、自分と関わりが弱いと感じる心理的距離のことである。つまりここでの遠近は勢力関係をそのまま反映した尺度である。また、コ(i)系とソ(ku)系はなわ張りをめぐって対立した関係にあるが、ア(ce)系の場合は両者に直接関わるものではなく、両者が第三者的な立場に回される指示対象について言及する際使われるので、両者の対立が見られるわけではない。

この分類は、韓国語と日本語の指示詞両方に適用することが可能である。韓国語を対象とした研究には、代表的な人称区分の研究に任洪彬(1987)がある。本論文では、指示詞の体系において話し手と聞き手から指示対象までの心理的距離という尺度を設定しているが、任(1987)では距離の概念は設定していない。任(1987:194)は「iは話し手が自分の勢力圏の中にあると想定する対象を指し示す時に使う、kuは話し手が聞き手の勢力圏の中にあると信じる対象を指し示す時に使う、ceは話し手と聞き手の勢力圏の外にあると想定する対象を指し示す時に使う」としている。しかし、指示対象が勢力圏の中にあると想定する根拠として、指示対象への関わり方が心理的に近いことを示す必要があるため、本論文では心理的な距離概念を人称区分に導入することにする。

人称区分原理による指示詞の使い分けがもっとも顕著に表われるのが、韓国語と日本語の指示詞における「感情的直示用法(emotional deixis)」だと考えられる。韓国語と日本語の指示詞の選択において、近・中・遠の物理的距離概念より話し手と聞き手を中心とする人称概念が優先される場合の指示詞の用法で、特に愛憎等感情が介在する用法のことを、ここでは指示詞の「感

情的用法」と呼ぶことにする。このような人称概念と指示詞の感情性についての考察は、韓国語と日本語の両言語において、従来の研究においてあまり詳しく記述されていない。ここからは、指示詞における人称概念と「感情性」との関係について考える。

3.1　emotional deixisと人称区分指示の関係

指示詞の感情的用法における感情性は、指示対象が話し手と聞き手のどちらにより深く関わる事柄であるかという人称概念を考慮することから由来すると思われる。こうした考えと立場を同じくする先行研究に、Lakoff (1974)のemotional deixisに関する研究がある。Lakoff (1974)は、特に次の例(3)のようなthatの用法では、話し手からの距離的な遠近によってthisとthatを使い分けるのではなく、聞き手との感情的連帯感や結束力を示す必要性からthatを「聞き手に近い(that near you)もの」、「聞き手のもの(that of yours)」として看做している点を指摘した。

(3)　a.（喉を診察する場面で）How’s <u>that</u> throat?
　　b.（共謀して）Button <u>that</u> lip!
　　c. If gangrene sets in, you’ll lose {your/ <u>that</u>} nose.　(Lakoff, 1974)

Lakoff (1974:352)[7]は、こうした感情的用法のthatは中称の指示詞の存在するいくつかの言語において、中称の指示詞が聞き手の領域を指している事実を連想させるとも指摘している。

以下では、このような人称概念を反映した韓日指示詞の感情的用法について、指示詞が指示性と感情性を合わせ持つ段階から、指示詞が本来持つ「指示性」が弱まり感情性がより目立つようになった結果、間投詞として定着してゆく様子を、間投詞の用法から遡って観察する。ここで「指示性」とは指示詞の、指示対象を指し示すという本来の機能のことである。指示詞と間投詞の関係について述べている先行研究に定延・田窪(1995)がある。この研究において「あの」は、データの格納場所へのアクセスのような機能を本務にしてそこから指示と間投詞の用法の共通性を考えているが、そのようなやり

方では以下で論じる「あれ」の用法が説明できない。

3.2　韓国語と日本語のemotional deixis

3.2.1　指示詞由来の間投詞

ここではまず日本語を対象に、もともとは指示詞に由来する言葉で、今は単に聞き手の注意を喚起するばかりでなく、とりわけ話し手の感情的な面を表わす間投詞について先に検討する。次のいくつかの例[8]を見られたい。

(4)　これこれ、静かにしなさい。
(5)　これはこれは、恐れ入ります。
(6)　めでためでたの若松さまよ、こりゃこりゃ。（広辞苑第五版より）
(7)　こら、何をする！
(8)　これはしたり、どなたかと存じました。（広辞苑第五版より）
(9)　それはそれは、誠に奇麗な御方でした。
(10)　そりゃ一大事。
(11)　それ、見たことか。/それっ！、行け！
(12)　それそれ、そこにあるでしょう。
(13)　それみたことか、滑ったじゃないか。（広辞苑第五版より）
(14)　それ、言わんこっちゃない。
(15)　そら、また叱られるぞ。　/　そら、また始まった。
(16)　そんな、ばかな…。
(17)　あれよあれよという間に、風船が飛んで行ってしまった。
(18)　あれよあれよと言ってばかりはおられんぞこりゃ。
（『竹内銃一郎戯曲集１』、「少年巨人」）
(19)　あれ！指切っちゃった。
(20)　ありゃ！しまったね･･･。
(21)　あら[9]、ま、失礼。

例(4)から例(21)までの中で、指示詞由来の間投詞は、3.2.2節と3.2.3節で考察する名詞を修飾する感情的指示詞とは違って、他の語句を修飾することなく

話し手の驚きや怒りなどの感情を表わす用法が見られる。例(16)と関連して油谷(2005:16)も否定的な意味を持つ形容動詞に先行する「そんな」について紹介している。つまり「そんな気の毒な」「そんな可哀想な」「そんな強欲な」などの例を挙げて、これらの表現がひとつのまとまった慣用表現になり、他の語句を修飾することなく使われている用法を指摘している。本稿では例(16)のように「そんな」だけを間投詞としてみなしたが、油谷の例は「そんな気の毒な」のように「そんな」が修飾する形容動詞の連体形までをひとつの慣用表現としてみなした点が異なる。油谷の挙げた慣用表現については、以下で考察する例(29)の「kukes cham!(そんなまったく！)」の場合と同様、指示詞とそれが結合する感嘆詞が一種の感嘆表現になったという説明ができる。

上記の例における指示詞由来の間投詞は、特に指示されるべき対象は存在せず、ある指示対象を指示するという本来の指示の役割を果たしていないため、指示性がかなり弱まり、実際これらの語が発せられる時は感情性が意識される。それではこのような感情性はどこから由来するのであろうか。それは、ほかでもない、「コ・ソ・ア」の３種類の語根の状況による使い分けに起因していると思われる。ただ、間投詞として完全に定着すればするほど、本来のこのような語根の使い分けは強く意識されない。

指示詞の間投詞的用法において、「縄張り」の概念で説明している研究として佐久間(1951)と渡辺(1952)が挙げられる。まず、佐久間(1951:21-22)の説明を紹介すれば次の通りである。

> 「間投詞的な「コラ・ソラ・アラ」も何かしら同趣の区別でつかいわけられていると思われます。もっとも、「コラコラ、アーン」は、特別の意味をもってますし、＜ソラ＞または＜ほら＞は、いくぶん原意を存すると思われるふしがありますが、＜アラ＞に至ってはほとんど全く感動の場合に使うだけで、格別の指しことばとしてのはたらきをするとは思われなくなっています。が、とにかく、かの三段階に応じて用いられるようなところもあって、興味をひかれます。」

ここで、「同趣の区別」や「かの三段階」が、「縄張り」による使い分けのこ

とである。次に、渡辺(1952)は、「コラ」「ソラ」「アラ」と、間あい言葉としての「コノー」「ソノー」「アノー」の例を挙げ、次のように説明している。

(22) a .「こらツ！信號を無視する奴があるかツ！」
b.「そら、又爪をかんだりしてる！　およしなさい。」
c.「あーら、又タバコすつてらつしやるのね。」(渡辺 1952)

例(22)で渡辺(1952:5-13)は、aに対し、「叱りつける人間は「こらツ！」と一喝あびせることによつて、叱りつけられる人間を、苦もなく自分の勢力下に引きずり込んで、活殺自在のイニシアティーヴを主張する。人格無視・頭ごなしといふ優越性は、この場合近稱「こ」のニュアンスである」としている。これに比べbの「そら」は「たしなめる程度の氣持ち」で、「とつた行動の非を、行動をとつた本人に自覺させ、後は本人の反省にまつ」ということで、やはり相手の領域を尊重しているとしている。cの「あーら」は「自分も退き相手にも押しつけずして弱い」感じだとしている。

(23) a.「何しろコノー、一人で三つの仕事をしなければならないのでねえ」
b.「それがソノー、一人で三つの仕事に目をくばつて居りますので･･･」
c.「でもアノー、私ひとりで三人分の仕事をして行かねばならないものですから･･･」(渡辺 1952)

例(23)で渡辺(1952:13)は、aは仕事に事寄せて己を語ろうとするところがあり、bは己の現状に相手の情を惹こうとするところがあり、cはおとなしく事情を説明している言葉と感じられるとしている。また「あのー」は他の二つに比べて性格に癖がなく、相手に与える刺激がもっとも少ないとし、未知の人への話しかけや、恐る恐るの発言、例えば、「アノー、帝塚山三丁目つてどのあたりでせうか」、「アノー、休講だとばかり思つてゐたものですから」などが、常に「アノー」で始められるのは、「ア」のそのような点を利用したものだとしている。

このような例に関して、渡辺(1952:13)はコ系やソ系と比べ、「「アノー」は他の二つに比べて性格にくせが無く、相手に與へる刺戟が最も少い」とし、そのため「未知の人への話しかけや、恐る恐るの發言」に良く使われるのだと、指示詞と関連させて説明する。つまり、本論文で言う指示詞の人称区分が間投詞の使い分けにも用いられているという指摘である。

しかし、間投詞における人称区分がもたらす効果は渡辺の指摘したことにとどまらない。実際の談話の中では、いきなり例(23b)のような発言で会話が始まることはないのである。ここでは、例(23b)に対し、より自然な談話の場面を与えるために、この文が以下で示すような例(24)のAのような質問に対する答えだという想定をする。

(24) A：鈴木さん、こちらの仕事の方はもう終っていただけましたか。
B：a. これが{＃φ/＃このー /そのー /＃あのー}、一人で三つの仕事に目をくばって居りますので･･･。
b. それが{φ/そのー /あのー /??このー}、一人で三つの仕事に目をくばって居りますので･･･。
c. あれが{*φ/*あのー/*このー/*そのー}、一人で三つの仕事に目をくばって居りますので･･･。

例(24)では、談話の中でのコ・ソ・ア系指示詞の選択条件を調べるために、例(23b)の「それがそのー、」の部分のコソア系統の全ての組み合わせの容認度を考察した。結論を先に言うならば、相手が持ちだした話題についてそれを受けるもっとも適切な指示詞はソ系[10]だということである。(24Ba)でコ系で話が始まることで容認度が下がる理由は、相手から提供された話題を自分の領域を表わすコ系で受けることが難しいためである。一方、例(24Ba)は、この発言が違う場面で使われる時は、容認度が上がる。以下で示すように、例(24Ba)が相手の言葉に対する話し手の答えではなく、自分の話を続ける際に使われる場合、自分が持ち出した話題として自分の領域として認識され、「コ」系で話を始めてもさほど不自然には感じられない。次の例を見られたい。

(24Ba')　私が受け持つ仕事は、責任を持って完璧にこなしたいのですが、これが{φ/このー/そのー/あのー}、一人で三つの仕事に目をくばって居りますので･･･。

(24Ba")　私は家族と一緒に過ごす時間も大事にしたいと思っているんですが、これが{φ/このー/そのー/あのー}、一人で三つの仕事に目をくばって居りますので･･･。

このように例(24Ba)と例(24Ba')(24Ba")の間で容認度の差が出る理由は、当該話題に対し、話し手と聞き手のどちらが管理する情報なのかという認識の違いである。つまり、話し手領域の「コ」系と聞き手領域の「ソ」系で代表される人称原理は、そのまま話し手と聞き手のそれぞれが管理できる知識領域として考えることができるということである。すなわち、「コ」系の領域は話し手が知っていてなおかつ操作できる知識が貯えられる領域である。一方、「ソ」系の領域は聞き手の既知の知識として聞き手の操作範囲内に納められる情報が貯えられる領域である。従って「ソ」系の領域の指示対象に対する知識については、話し手は聞き手を介在して考えるしかない、話し手にとっては間接的知識になるわけである。このような観点は次で引用する黒田(1979/1992)の考え方と一致するものである。黒田(1979/1992:103)は、眼前用法におけるソの意味機能について「聞き手（他者）という概念が本質的に関係して来る」ものとし、さらに眼前的用法においてソの意味は「他者の直接的知識を、自己（意識）の直接的知識ではないもの（自己の直接的意識と対立するもの）として把握するものである」としている。

一方、コ系列の用法と関連し、久野(1973:188-189)は次のように述べている。「コ－系列も、目に見えないものを指すのに用いられる場合があるが、これはあたかも、その事物が、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞的色彩が強いようである。」そして、次のような例を挙げている。

(25) a.　僕ノ友達ニ山田トイウ人ガイルンデスガ、コノ男ハナカナカノ理論

家デ・・・

b. アア、ソノ（アノ、＊コノ）人ナラ、僕モヨク知ッテイマスヨ。
アノ（＊ソノ、＊コノ）人ハ随分議論好キデスネ。　（久野 1973）

上の例について、久野(1973:189)は、「眼前指示的用法においては、指示対象がいわば話し手と聞き手との間を行ったり来たりし得るのである。ところが、(25a), (25b)[11]に見られるように、眼前にないものを指す場合に用いられるコー系列には、そのような用法がない。話し手が「コノ人」と言ったら、聞き手は絶対に「コノ人」を用いることはできない」としている。またそれに続いて「目に見えないものを指すコー系列は、このように話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない。」と付け加えている。ここで久野は、なぜ話し手だけが指示対象を知っている場合にコ系が使われるのかについての説明はしていないが、以上の考察からも明らかなように、これらの例でのコ系の出現は人称原理によって支えられているのである。つまり話し手の直接的知識として提示された指示対象は、聞き手にとってはあくまでも間接的知識であるしかなく、話し手領域の指示詞のコ系で再びその指示対象を指し示すことはできないのである。あくまでも間接的知識であることを示すソ系でもって指示対象を指すことになる。

以上の考察から、眼前指示用法もしくは本論文での現場指示用法のコ系とソ系に限って言うならば、久野と黒田は、話し手領域としてのコ系と聞き手領域としてのソ系を認めているという点では概ね意見が一致していると思われる。

以上のような指示詞から由来したと思われる間投詞の使い分けは、韓国語でも観察される。

(26) （食堂で勘定の際、財布のないことに気がついて）
ilen!　khunil-na-ss-kwun!
こんな　一大事-起こる-過去-感嘆
「これは！ 大変だ！」

(27) （兄妹のBとAの会話。兄Bのズボンのお尻の部分に穴が開いており、

それを見つけた妹Aが、Bの息子の婚約者のスンミにそれがばれてはいないかと心配する状況）

A: oppa･･･.（笑う）

兄

「お兄さん･･･。」

B: （冷蔵庫からお水を出そうとして振り向く）･･･？

A: paci　thakaycy-ess-eyo.

ズボン　破れる-過去-待遇

「ズボンのお尻の所に穴が空いてるんじゃない。」

B: （ズボンのお尻の所に手を当ててみて）ilen･･･.

こんな

「これは･･･。」

(Bの妻、登場し、状況を把握して笑う)

A: ile-kwu　o-n　ke-eyyo？　sungmi-ka　ta　pw-ass-keyss-ney.

こうし-て　来-た もの-待遇　スンミ-が　全て　見る-過去-推量-感嘆

eccem　coh-a.　ppalli　kalaip-eyo.

どうすれば　よい-感嘆　早く　着替える-待遇

「こんな格好で帰ってきたんですか。スンミに全部見られたかもね。もう、どうしましょう。早く着替えて。」

B: ･･･.（すばやく退場）

（ドラマ『みてはまたみて』の台本：韓国高麗大学コーパス:「21世紀世宗計画」）

(28)（子供を殴っている人を見ながら）

{* kulen! /celen!} salam-i　cele-l　swu-to　iss-na!

*そんな/あんな　人-主格　ああする-連体場合-も　ある-疑問

「あんな！よくもあんなことができるな！」

(29) (暴力事件の報道を聞いて)

kukes cham! salam-i kule-l　swu-to　iss-na!

それ　ま！　人-主格　そうする-連体　場合-も　ある-疑問

「そんな！よくもそんなことができるな！」

(30) celen!　tto　ssawum-cil-i-kwun!

あんな　また　喧嘩-繰り返し-指定-感嘆

「あら！また喧嘩してる！」

(31) somun-ey tut-ten　taylo　kukes-un　mal-inci　salam-inci　al　swu-ka

噂-に　聞く-過去　通りに　それ-は　馬-なのか　人-なのか　知る　方法-が

eps-nun　kes-i-ess-ki　ttaymun-i-ta.

ない-連体　もの-指定-過去-名詞化　ゆえ-指定-平叙

tewuki　nollawu-n　kes-un　elma　hwu ku　mal-ey　nalkay-ka　tot-a

さらに　驚くべき-連体　こと-は　しばらく　後　その　馬-に　翼-が　生える-て

nwun　kkamccak-ha-l　sai-ey　ttang-ul　pakcha-ko　hanul-ul　hyang-hay

目　瞬き-する-連体　間-に　土-を　蹴る-て　空-を　向く-て

sosaolu-nun　kes-i-ess-ta.

飛び立つ-連体　こと-指定-過去-平叙

'as!　celen.'

あ　あんな

salam-tul-un　motwu-tul　swum-ul　cwuki-ko　neks-ul　ilh-ess-ta.

人-たち-は　みんな-たち　息-を　殺す-て　魂-を　失う-過去-平叙

mal-un　cemcem　hanul　nophi　ollaka　tutie　khetala-n

馬-は　次第に　空　高く　上がる. 連用　とうとう　大きな-連体

nalkay-man-i　poi-l　ppun-i-ess-ta.

翼-だけ-が　見える-連体　のみ-指定-過去-平叙

「噂にきいていた通り、それは馬なのか人なのか区別がつかないものであったからである。それにまして驚くべきことに、しばらくして、その馬に羽が生えてきてあっと言う間に大地を蹴って空に向かって飛び立ったのであった。

「あ！あら。」

人々は皆息を殺して呆然となった。馬はますます空高く飛んでいき、とうとう大きな翼だけが見えるのみであった。」

（漫画『コチプセ』: 韓国高麗大学コーパス:「21世紀世宗計画」）

例(26)から例(31)の中で、「ilen/ kukes cham /celen」は、それぞれ直訳すると日本語の「こんな、そんな、あんな」に該当する言葉で連体形の形式を取っているが被修飾節を取っておらず、例(29)を除いて、それだけで一つの文をなしている。つまり、例(26)から例(31)まではそれぞれ二つの文もしくは一つの文から成っており、一番目か二番目の文中の指示詞は、形態的には形容詞の連体形だが、統語的に連体修飾を行わず独立した間投詞としての役割を果たしている。

こうした間投詞はそれぞれ、例(26)と(27)では自分に関わりのある、ある望ましくない事件が起きたことをあらわしており、「i(コ)」系が使われている。「ku(ソ)系」に関しては、例(28)のように他人が関与していることを直接現場で見ている場合は「ku(ソ)系」が現れにくく、例(29)のように伝聞の場合は現れることが可能である。つまり、文脈指示だと考えることも可能だが、文脈指示の「i(コ)系」を認めるならば、日本語のように韓国語においてもコ系とソ系の使い分けが認められる。ただ指示詞から由来したと思われる間投詞の用法は韓国語の場合、殆ど見つからず、例(28)の 「kukes cham! (意訳：そんな)」のように指示詞「kukes(それ)」と間投詞「cham!(まったく！)」の結合という特殊な形が見つかるのみであった。このような用法については油谷(2005:16)も次のような例を挙げている。つまり「celen!（直訳：あんな、日本語訳は筆者による。以下同様)」「(ilen/celen) bilemekul!（(こんな/あんな）こん畜生！)」「(ilen/celen) wulacil!（(こんな/あんな）こん畜生！」「(ilen/celen) mangchukhan! ((こんな/あんな）えげつない！) 」などの例を挙げ、これらは生産性が全くなく、むしろ感嘆詞に変化していると考える方がよさそうだとしている。

ここでさらに「ce(ア)」系について詳しく観察してみると、例(29)(30)での「celen」は、起きた事件が自分に関わることでもなければ、ある特定の対象に対する怒りや驚きを抱く状況でもない場合に、話し手の第三者的な立場をあらわす間投詞であり、「(あら）まあ」と訳される。

以上のような現象とは別に、韓国語には、指示詞から派生し、呼び掛け言葉として定着したと思われる間投詞がある。食堂で店員を呼ぶ時などに使う「yeki-yo (直訳:ここです)」、「ceki-yo (直訳：あそこです)」等である。

(32) ceki-yo {yeki-yo}, yeki mul com kacta-cwuseyyo.
あそこ-待遇 ここ-待遇 ここ お水 ちょっと 持つ-ください
「あの、すみません。ここ、お水ちょっとお願いします。」

(33) cekiyo･･･, com tuli-l malssum-i issnuntey-yo.
あそこ-待遇 ちょっと あげる-未来連体 言葉-が ある-待遇
「あの…、ちょっとお話したいことがありますが。」

「ceki-yo(直訳：あそこです)」[12]は、例(32)のように呼びかけ言葉としても使われるが、例(33)のように言葉を探す時にも用いられ、これは日本語の「あの…」などに該当する。例(32)の場合、「ceki-yo」（直訳：「あそこです」）と「yeki-yo」（直訳：「ここです」）のどちらを使ってもいいが、問題は店員を自分の方に呼んでいるのにもかかわらず「ceki-yo」（直訳：「あそこです」）という言葉も使われるという点である。この場合の呼びかけ言葉は、店員の立場に自分を置いて「あそこです」と言っているわけでもない。これは、例(33)のように言葉を探す時に使う用法が、今は完全に人を呼びかける語として定着したと見るべきであろう。日本語で言えば「あのですね…」と店員を呼んでおいて、来るまでの間に注文を考えていた(言葉を探す行為の一種)ことから始まったのではないかということである。これらの例は、定延・田窪(1995:79)の「あのー」の用法の説明で、「適切な表現の検討」に当てはまる例だと思われる。定延・田窪(1995:79)は次のように説明している。

> 「適切な表現の検討は、言いたいこと（これはすでに漠然とにせよ決まっている）に適した言い方を心的バッファで編集するという操作である。（この時「あの（ー）」は、話し手が聞き手とのインターフェイスを遮断するというよりも、むしろ接続・保持しようとしている宣言として働く。）」

しかし、定延・田窪(1995)の説明は用法の記述としては妥当であるが、指示詞との関連性を述べてはいない。韓国語においても例(32)と(33)に見られる

ようにce(ア)系がもっともよく選ばれる理由は、前掲の例(23)のような日本語の例について渡辺(1952)が指摘したように、指示詞の人称区分で以って説明することができる。

渡辺の考えと同様、漠然とした考えをまとめる時間を確保するためにこれらの間投詞が使われるとすれば、指示詞由来の間投詞の中で選ばれるのは、具体的な自分の考えを指示するコ系や相手に関わる内容を指示するソ系のいずれでもない、ア系の指示詞がもっとも適切だと思われる。

本節で考察した指示詞由来の間投詞の用法は、以下の節で考察する、指示詞が話し手の評価が入った語彙や罵り言葉を修飾する際に現れるいわゆる「指示詞の感情的な用法」と関連がある。しかしこれらの二つの用法にはいくつかの点で違いが認められるが、その違いについて以下で考察する。

3.2.2　指示詞が話し手の評価が入った語彙を修飾する場合

最初に指示詞が話し手の評価が入った言葉を修飾する場合について、日本語と韓国語の例をいくつか挙げてみる。

(34) こんな美しい夕焼け、初めて見ましたよ。

(35) そんな不思議な人がいるなら、一度会って見たいものです。

(36) あんな奇妙きてれつなもの、見たことないよ。

(37) ile-n　mengchengha-n　nom-ul　pw-ass-na!
このようだ-連体　馬鹿な-連体　やつ-目的格　見る-過去-疑問
「こんな馬鹿なやつがいるか！」

(38) cele-n　molsangsikha-n　inkan-i　iss-na!
あのようだ-連体　非常識な-連体　人間-主格　ある-疑問
「あんな非常識な人間がいるなんて！」

(39) kule-n　moyokcek-i-n　ensa-nun　tocehi　cham-ul　swu　eps-kwun-yo!
そのようだ-連体　侮辱的-指定-連体　発言-は　到底　我慢する-連体　方法　ない-感嘆-待遇
「そんな侮辱的な発言には、これ以上我慢できませんよ！」

例(34)から例(39)の中での指示詞は、例(4)から例(33)の中での指示詞と同じ連体修飾の語形を取っているが、若干性格を異にしている。なぜなら、例(34)から例(39)のように指示詞が、対象についての話し手の評価を表す言葉を修飾しているとき、指示詞が間投詞として独立して文が二つになることはないからである。あくまでも一つの文の中で、指示詞はすぐ後に続く修飾語句にかかり、話し手の感情を表しながら、なおかつその修飾語句が修飾している対象をも指し示すという指示詞本来の機能も果たしているのである。

まず、感情性については、これらの例では、同じ場面で指示詞のすぐ後ろに続く修飾語句を省いても、文中の感情的な意味あいは、指示詞が持っている感情的な意味あいのおかげで何ら影響されることなく維持される。例(34')から例(39')を参照されたい。

(34') こんな夕焼け、初めて見ましたよ。
(35') そんな人がいるなら、一度会って見たいものです。
(36') あんなもの、見たことないよ.
(37') ile-n　nom-ul　pw-ass-na!
　このようだ-連体　やつ-目的格　見る-過去-疑問
　「こんなやつがいるか！」
(38') cele-n　inkan-i　iss-na!
　あのようだ-連体　人間-主格　ある- 疑問
　「あんな人間がいるなんて！」
(39') kule-n　ensa-nun　tocehi　cham-ul　swu　eps-kwun-yo!
　そのようだ-連体　発言-は　到底　我慢する-連体　方法　ない-感嘆-待遇
　「そんな発言には、これ以上我慢できませんよ！」

しかし、これらの文の中で指示詞を省いてしまえば、いつの時点でのどの対象に向けての感情なのかがわからなくなってしまう。そのため指示詞を省いたままでは、同じ状況の下で、本来の話し手の意図通りの発話は行われなくなる。例(34")から例(39")を見られたい。

(34") ？美しい夕焼け、初めて見ましたよ。
(35") ？不思議な人がいるなら、一度会って見たいものです。
(36") ？奇妙きてれつなもの、見たことないよ.
(37") *nom-ul　pw-ass-na!
やつ-目的格　見る-過去-疑問
「*やつがいるか！」
(38") *inkan-i　iss-na!
人間-主格　ある- 疑問
「*人間がいるなんて！」
(39") *ensa-nun　tocehi　cham-ul　swu　eps-kwun-yo!
発言-は　到底　我慢する-連体　方法　ない-感嘆-待遇
「*発言には、これ以上我慢できませんよ！」

ここで指示詞を省くと元どおりの意味を表わすことができなくなるのとは対照的に、次で観察する、指示詞が罵り言葉を修飾する場合は指示詞を省いても本来の意味にはそれほど影響を及ぼさないことがわかる。

3.2.3　指示詞が罵り言葉を修飾する場合

指示詞が罵り言葉を直接修飾する場合にも感情性は表れる。この場合では日本語と韓国語では似たような現象が観察されるが、用法上の違いが存在する、という点が特に注目に値する。ここではまず「コ」系と「i」系を使う場面を中心に考えてみたい。結論を先に言うと、これら近称の用法では両言語においてさほど違いは見られない。

(40) この恥知らず！
(41) この役立たず！
(42) このうすらとんかち！
(43) i　cimsung!
この　獣

「この獣！」

(44) i　papo!

この　ばか

「このばか！」

(45) i　salinca!

この　人殺し

「この人殺し！」

ここで、指示詞の同じような感情的用法でありながら、(34)から(39)の例と(40)から(45)の例を分けるのは、ある用法上の違いが見られるからである。その違いとは、(34)から(39)の例では、指示詞は「指示性」と「感情性」を同時に表しているのに対し、(40)から(45)の例では、指示詞は主に会話の現場で目の前にいる相手を罵るために使われるので、わざわざ相手を指し示す必要もなく、指示詞の「指示性」はかなり弱まっており、「感情性」が強く働いているという点である[13]。

そのため、(40)から(45)の例では、（34）から(39)の例で指示詞を省略できないのとは対照的に、指示詞を省いても本来の話し手の発話意図にそれほど影響を及ぼさない。もちろん、指示詞を付けた方が、指示詞を省く方に比べて、話し手の聞き手に対する身内への責任感に似たようなニュアンスが感じられる。指示詞を省いた場合は、指示詞がある場合に比べより聞き手を突き放しているような感じがする。しかし、そのような「感情上」の差はあるにしても、基本的に、指示詞を付けても省いても、相手を罵るという本来の話し手の発話意図に変わりは生じない。(40')から(45')の例を見られたい。

(40') 恥知らず！

(41') 役立たず！

(42') うすらとんかち！

(43') cimsung!

けだもの

「けだもの！」

(44') papo!
ばか
「ばか！」

(45') salinca!
人殺し
「人殺し！」

以上、発話の現場で目の前にいる相手を怒鳴りつける時に使う「コ」系と「i」系の場合について考えてみた。これらの例においての「コ」系と「i」系の場合、主に現場指示用法であり、目の前にいる相手を怒鳴りつけるために使われているので、指示詞の指示性がかなり弱まっている。

「コ」系と「i」系が罵り言葉を修飾する際は指示性が弱まるという共通点を持つのに対し、両言語において中称と遠称の指示詞が罵り言葉を修飾する際は意味上の違いが生じる。結論から先に述べると、まず中称における両言語の違いとしては、日本語では中称のソ系が罵り言葉を修飾することができないのに対し、韓国語ではku系で罵り言葉を修飾することが可能であり、話し手からの心理的距離感を表すことができる。次に遠称における違いとしては、日本語では遠称のア系が罵り言葉を修飾する時は物理的に離れた地点を指す必要があり、罵る対象の位置を指し示すという指示性が意識される。しかし、韓国語では遠称のce系で罵り言葉を修飾する際は、例えその罵り言葉で以って罵る対象が目の前にいても使うことができ、物理的距離を表すというよりは心理的距離を表すために遠称が選ばれたと解釈したほうが妥当である。

以下からそれぞれの言語の中称と遠称の指示詞が罵り言葉を修飾する例について考えてみたい。

(46) (話し手が喋っている途中で、聞き手がそれを無視し突然その場から去って行くと、その背中に向かって)

atta,	ko kasina,	way	mal-ul	cwungkan-ey	ssaktwuk
あ	その 小娘	なぜ	言葉-目的格	途中-で	すぱっと

kkunhko　kulentanya?

切って　そうするのか

「あ、あの小娘、何で人の言葉を途中で、すぱっと遮ったりするのかな。」

(『ポップコーン』、韓国SBS、2000年放送)

(47) (Aの家に早朝からBが仕事の依頼をしに押しかけてきた場面で)

A: saypyek-puthe　nanliya,　aissi・・・.

朝っぱら-から　大騒ぎする　もう

「朝っぱらから迷惑かけやがって、もう・・・。」

B: ku casik　cengmal toykey　kwuncilengkeliko　issney,　cincca・・・.

その やつ　本当に　すごく　ぶつぶつうるさく　している　本当に

「こいつ（Aを指す)、本当にぶつぶつうるさいな、もう・・・。」

(『新・貴公子』、韓国SBS、2000年放送)

日本語の場合、例(46)と(47)の日本語訳からもわかるように、相手を罵る時に「ソ」系を使うことは不自然である。一方、韓国語の場合「nyesek:やつ」、「casik:やつ」などの、相手を軽蔑する言葉と「ku(ソ)」系との共起は可能である。また、これらの軽蔑語の前に付いている韓国語の「ku(ソ)」系は省略可能である。その理由はこれらの場面はi系を使った時と同様、目の前にいる相手を罵る場面であるのでわざわざ指示詞で以って相手を指し示す必要はないからである。従ってここで使われたku系は物理的距離を指し示す役割よりは、話し手の聞き手に対する心理的距離を表すために選ばれたと理解できる。

次に「ア」系と「ce(ア)」系の場合について次の例を見られたい。

(48) (自分からかなり離れている聞き手に向かってつぶやく)

あの馬鹿が・・・。

(49) (自分の前を通り過ぎ、去って行く娘の背中に向かって)

ai・・・,　cenom-uy[14] kicipay・・・.

あ　あいつ-の　小娘

「もう・・・、あの子ったら・・・。」(『新　貴公子』韓国SBS、2000年放送)

日本語の場合、例(48)の「あの」は話し手からかなり離れている地点の聞き手を指し示す役割を果たしている。一方、韓国語の場合、例(49)からもわかるように、中称の例(46)と(47)と同様、さほど離れていない地点に位置する指示対象を指示する際も遠称の指示詞を使うことができる。これは即ち、ce系で修飾された罵り言葉を使うことによって、話し手から指示対象までの物理的距離よりは感情的な距離感を表していると理解することができる。これらの例で近称や中称ではなく遠称が選ばれた理由は、指示対象を自分の領域から排除し、聞き手が自分とは無関係であるということを表していると思われる。

以上、韓国語と日本語の指示詞の現場指示において、人称概念が優先される場面の代表例として指示詞の感情的直示用法と指示詞由来の間投詞を中心に考えてみた。

4. まとめ

本論文では韓国語と日本語の指示詞を対象に、現場指示用法が人称概念によって説明できる場面（人称区分指示）と距離概念によって説明できる場面（距離区分指示）が共存しているという立場のもと、次の点について考察した。つまり、話し手と聞き手の人称の対立の際に現れる「コ」と「ソ」の用法の中でも指示詞の感情性という側面に着目し、今まで取り扱われることの少なかった指示詞の感情的直示用法と指示詞由来の間投詞を対象にして、指示詞の人称原理がどのような形で現れるのかについて考察した。その結果、次の二点が明らかになった。

一つ目は、近称と中称、遠称の選択原理には話し手の指示対象に対する関与の度合い、心理的距離という要素が存在する、という点である。

二つ目は、韓国語と日本語の指示詞の感情的直示用法と指示詞由来の間投詞の用法には共通点と違いがある、という点である。共通点と違いのそれぞれについて詳しく述べると次の通りである。

まず共通点としては、これらの用法の中でのコ系とソ系、i系とku系は話し手と聞き手のなわ張りをめぐって対立した関係にある。一方、ア系とce系の場合は話し手と聞き手の両者が第三者的な立場に回される指示対象につい

て言及する際使われるので両者の対立が見られるわけではない、という点が挙げられる。

次に違いとしては、両言語において中称と遠称の指示詞が罵り言葉を修飾する際は意味上の違いが生じる、という点が考えられる。中称における両言語の違いとしては、日本語では中称のソ系が罵り言葉を修飾することができないのに対し、韓国語ではku系で罵り言葉を修飾することが可能であり、話し手からの心理的距離感を表すことができる。遠称における違いとしては、日本語では遠称のア系が罵り言葉を修飾する時は物理的に離れた地点を指す必要があり、罵る対象の位置を指し示すという指示性が意識される。しかし韓国語では遠称のce系で罵り言葉を修飾する際は、例えその罵り言葉で以って罵る対象が目の前にいても使うことができ、物理的距離を表すというよりは心理的距離を表すために遠称が選ばれたと理解できる。

これらの考察の過程で確認できた各指示詞の用法の意味上の違いは、実際の言語場面で使われて始めてその意味が決定される類のものである。このような特徴から本論文の考察は、両言語における指示詞の語用論的側面を中心に記述したと考えることができる。

今後も様々な談話資料を基に、指示詞の語用論的側面について考察していく予定である。

注

1 本稿は2004年に京都大学大学院で博士号を授与された、筆者の博士論文『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』の内容の一部を加筆・修正したものである。

2 田中(1981:2-3)は指示詞について「「コソア」はもっぱら指示に関する言語形式であるとして、「指示詞」という名で包括的に扱われることがある」とした上で、「「コソア」は一般に「指示」という機能を持つ言語形式のうち、ある特殊な「指示」のしかたをするものである」と定義している。本論文での指示詞の定義は田中の定義に近いが、意味と形態の両面で改めて定義を下した。

3 東郷(2000:28)は、談話について「談話とは、話し手と聞き手の間の相互行為により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象(mental representation)で

ある」と定義している。本稿における「談話」は東郷の定義に従う。

4 本論文での韓国語のローマ字表記は、Samuel E. MartinによるYale式(The Yale Romanization System)に従っている。なお、本論文では、韓国語の例文に日本語のグロス(gloss、逐語訳)と意訳を付けている。ただし、グロスの情報の細かさの面では、形態素の切れ目ではなく、意味が通じる程度のグループ単位ごとに付けることにする。例えば、名詞に付く助詞には、主格助詞・目的格助詞を、名詞の修飾語には連体形語尾を、動詞には過去・平叙・疑問・待遇語尾の表記をした。

5 〈表１〉は、崔(1955)と佐久間(1951)の指示詞の分類表を参考に、形態的に品詞分類したものである。

6 本論文は、指示詞に対して従来の品詞分類を越えた統一的な研究を行った佐久間(1951)の研究と同様の立場に立って、指示詞の意味的用法を考察したものであるが、ここであえて形態的な品詞分類を行ったのは、韓日指示詞の体系における基本的な知識を先に整理するためである。

7 「This use of emotional-deictic that is somewhat reminiscent of something found in many languages, namely an intermediate demonstrative, spatially in between ‘this — related to me’ and ‘that — out yonder.’ The intermediate form is most often translated as ‘that near you, that of yours.’」 R. Lakoff (1974:352)

8 例(4)から(21)までの中でのコ・ソ・ア系の言葉は品詞的には完全に間投詞として定着したものや、まだ指示詞として考えるべき言葉が混在している。具体的に見てみると、例(4)(6)(7)(10)(11)(13)(14)(15)(17)(18)は指示詞と異なり第一拍目にアクセントがあり、完全に間投詞として使われている。一方、例(5)(8)(9)(16)は平板型のアクセントを持ち、指示詞として見るべきである。また例(12)(19)(20)(21)の場合、アクセントが頭高型と平板型の２種類が観察されることから、談話の場面によって指示詞としての用法と間投詞としての用法が使い分けられていると考えられる。このアクセントに関する見解は千田俊太郎氏の協力による。一方、玉井尚彦氏の見解によると例(10)は平板型アクセントで指示詞と見ることも可能であり、むしろその可能性の方が強いとのことであった。また例(19)について、アクセントは両パターン有り得るが、両パターンとも指示詞とは看做しにくいとの判断を示した。しかし、全体的に言えば確かにアクセントパターンと「間投詞と指示詞の区別」に対応はあるとの見解であった。本論文ではコ・ソ・ア系言葉の、間投詞と指示詞としての用法の区別を目的としているよりは、その感情的用法を見ることに重点を置いているため、ここではこれ以上の考察には踏み込まないことにしたい。

9 「あら」は通時的な観点からいえば、もともと感嘆詞である「あな」に通じる言葉で、指示詞との関連性は認められないとの見解もある（『古語辞典』旺文社1960、『新編大言海』富山房1982）。しかし、本論文では、渡辺(1952)と佐久間(1951)の共時的研究と同様、共時的な話者の直観として、指示詞との繋がりを認

識している事実を重視する立場を取る。

10 ここでのソ系は文脈指示用法であり、現場指示用法を扱うという本章の趣旨から離れるが、コ系とソ系における人称原理を説明するために止むを得ず、例を挙げたことを断わっておく。

11 例文の番号は筆者が変えている。

12 この例は玉井尚彦氏の協力による。

13 指示詞の感情的用法と関連し、英語では指示代名詞の喚情的(affective) 用法と呼ばれているものがある。『新英語学辞典』(研究社、1982)の説明によれば、この用法は英語で賞讃・非難・軽蔑など、様々な感情を暗示する。知的意味においては特に「この」「その」と指す必要のない場合に起こるが、形容詞的用法が主なものである。例として次のような文が紹介されている。

(1) Those Godless dogs!
「あの罰当たりめ！」（非難）

(2) For all their talk, they're no good, these foreigners!
「口先だけで駄目だな、こいつら外人は！」（軽蔑）

14 ここでuy(日本語訳：の）はcenom(あいつ)とkicipay(小娘)が同格であることを表わす助詞であり、所有関係を表わすものではない。

【参考文献】

張京姫 (1980) 「cisi-e i-ku-ce-uy uymi-punsek」(指示語i/ku/ceの意味分析)『語学研究』16-2. ソウル大学語学研究所. (再録:『kwuke-uy thongsa-uymi-lon』(韓国語の統辞意味論)(1983) 283-305. 塔出版社.)

張奭鎭 (1972)「Deixis-uy sayngsengcek kochal」(Deixisの生成的考察)『語学研究』8-2. ソウル大学語学研究所.

崔鉉培 (1955)『wuli-mal-pon』（我が語法）. Seoul: cengum-munhwa社.

Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics (Fourth Edition)*. Blackwell Publishers.

服部四郎 (1961)「「コレ」「ソレ」「アレ」とthis, that」『英語青年』107-8: 412-413.

任洪彬 (1987)『kwuke-uy caykwi-sa yenkwu』(韓国語の再帰詞の研究). Seoul: 新丘文化社.

神尾昭雄 (1990)『情報のなわ張り理論』. 東京: 大修館書店.

金善美 (2001)『談話モデルによる韓日指示詞の指示領域の比較分析』修士論文. 京都大学大学院.

金善美 (2002)「指示詞kuとceの現れ方と知識の共有度について」『朝鮮学報』185: (1)-(23). 朝鮮学会.

Kim Sun-mi (2003a) On the Conversational Strategy in the Use of the Distal Demonstrative *a* following Proper Nouns in Modern Japanese. *the Proceedings of the Second Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics*: 437-446. The Discourse and Cognitive Linguistics Society of Korea.

金善美 (2003b)「hankwuke-wa ilpone-uy cisisa-uy pi-ciksi-yongpop-kwa inching-wenli-ey tayhaye」(韓国語と日本語の指示詞の非直示用法と人称原理について) 『2003年度韓国言語学会学術大会発表論文集』123-135. 韓国言語学会.

金善美 (2004a)「現場指示と直示の象徴的用法の関係 ―日韓対照研究の観点から―」『日本語文法』4-1: 3-21. 日本語文法学会.

金善美 (2004b) 『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』博士論文. 京都大学大学院.

金水敏 (1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4:67-91. 言語処理学会.

金水敏 (2000)「指示詞」『別冊国文学　現代日本語必携』160-163.

金水敏・田窪行則 (1990)「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』vol.3: 85-116.

金水敏・田窪行則 (1992)「日本語指示詞研究史から/へ」金水敏・田窪行則（編）『日本語研究資料集　指示詞』151-192. 東京: ひつじ書房.

小泉保 (1988)「空間と時間における直示の体系」『言語研究』94: 1-24.

久野暲 (1973)『日本文法研究』. 東京: 大修館書店.

黒田成幸 (1979)「(コ）・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集　英語と日本語と』. 東京: くろしお出版.（再録: 金水敏・田窪行則(1992)（編）『日本語研究資料集　指示詞』91-104.）

Lakoff, R. (1974) Remarks on this and that. *Chicago Linguistic Society* 10: 345-356.

三上章 (1955)『現代語法新説』. 東京: くろしお出版.

森田良行 (1968)「『行く、来る』の用法」『国語学75集』.

森田良行 (1973)「感動詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』178-208. 東京: 明治書院.

森田良行 (2002)『日本語文法の発想』. 東京: ひつじ書房.

森山卓郎 (1996)「情動的感動詞考」『語文』65: 51-62. 大阪大学国語国文学会.

定延利之・田窪行則 (1995)「言語における心的操作モニター機構」『言語研究』108: 74-93.

阪田雪子 (1971)「指示語「コ、ソ、ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21: 125-138.

佐久間鼎 (1951)『現代日本語の表現と語法』（改訂版）. 東京: 厚生閣.（1983 くろしお出版より復刊.）

申惠璟 (1985)「韓国語の指示詞i, ku, choと日本語の指示詞コ、ソ、ア」『Sophia

Linguistica 』18: 102-112. 上智大学.
正保勇 (1981)「「コソア」の体系」『日本語教育指導参考書8日本語の指示詞』1-50. 東京: 国立国語研究所.
高橋太郎 (1956)「「場面」と「場」」『国語国文』25-9. 京都大学文学部国語国文学研究室. （再録: 金水敏・田窪行則(1992)（編）『日本語研究資料集　指示詞』38-46.）
高橋太郎・鈴木美都代 (1982)「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3: 1-44. (国立国語研究所報告集71) 東京: 国立国語研究所.
田村マリ子 (1978)「指示詞 ― 朝鮮語i/ku/ce系列と日本語コ・ソ・ア系列との対照 ―」『待兼山論叢（日本学）』12: 3-14. 大阪大学文学部.
田中望　(1981)「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語教育指導参考書８日本語の指示詞』51-122.　東京: 国立国語研究所.
東郷雄二 (2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7: 27-46. 京都大学.
梅田博之 (1984)「ilpon-e-uy cisi-sa-uy yongpep -hankwuk-e-uy cisi-sa-wa-uy tayco-lul thonghaye-」(日本語の指示詞の用法 ―韓国語の指示詞との対照を通じて―)『牧泉兪昌均博士還甲記念論文集』863-873. 韓国啓明大学校出版部.
渡辺実 (1952)「指示の言葉」『女子大文学』5: 1-20. 大阪女子大学国文学科.
吉田朋彦 (2000)「方角と方向の指示詞について」『日本語　意味と文法の風景』193-209.ひつじ書房.
油谷幸利 (2005) 「接続形式における日朝対照研究　ー朝鮮語教育の観点からー」第56回朝鮮学会大会公開講演原稿: 1-22.

Emotive and Interjectional Uses of Demonstratives *Ko/So/A* in Japanese and *I/Ku/Ce* in Korean

Sunmi Kim

Key words: 韓国語, 日本語, 指示詞, 直示, 人称区分指示, 間投詞
Korean, Japanese, demonstratives, deictic, personal deixis principle, interjection

Since Sakuma (1951), Watanabe (1952), and Kamio (1990), it has been widely assumed that demonstratives in Japanese are distinguished by personal deixis, rather than by distal deixis. The demonstrative *ko-* is for what is directly related to the speaker, *so-* for what is directly related to the hearer, and *a-* elsewhere. Basically, demonstratives in Korean, too, have been similarly described in the light of this explanatory device, which may be called the 'personal deixis principle'.

In this paper, I examine "emotive" and "interjectional" uses of these demonstratives in Japanese and Korean, and show that the same three-way distinction based on the personal deixis principle, that is, (i) closeness to the speaker, (ii) closeness to the hearer and (iii) other situations, is maintained even in these uses.

The findings in this study can be summarized as follows.

First, the three-way distinction of deixis of Korean and Japanese is determined by the level of involvement and psychological distance of the speaker.

Second, there is a point in common and a point of difference in emotive and interjectional uses of demonstratives in Korean and Japanese. The point in common is that the opposition between Japanese *ko-* and *so-* and that between Korean *i-* and *ku-* both reflect the contrast between the territory of the speaker and that of the hearer. The difference between the two languages manifests itself when *so-* and *a-* in Japanese and *ku-* and *ce-* in Korean are used to modify "abusive words", that is, words that imply an abusive and insulting characterization of their referents. In Japanese, *so-* cannot modify an abusive word, while in Korean, *ku-* can modify such a word to indicate the speaker's psychological distance from its referent. *A-* and *ce-* also exhibit a difference between the two languages. In Japanese, *a-* can modify an abusive word, if it is used for a referent that is physically distant from the speaker. In this usage, the "finger-pointing" (in the literal sense of the word) nature of the primarily deictic demonstratives is usually

strongly felt. In Korean, on the other hand, *ce-* modifying an abusive word can be used even when the referent is close to the speaker. When *ce-* is selected for this use, it indicates that there is a psychological but not physical distance between the referent and the speaker.

The semantics of demonstratives in emotive and interjectional usages cannot be properly characterized without actual situations that call for their use. In this sense, the description of demonstratives in this study, like most descriptions of demonstratives in purely deictic usages, is based on pragmatics.